

## 待降節第3主日 説教 「主イエスの望み」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年12月11日

イザヤ書 55 : 1-11

待降節第三主日を迎えました。昨日は、この礼拝堂で一足早く、幼稚園のクリスマス礼拝が行われましたが、恒例となっておりますクリスマスページェントでは、クリスマスを祝う子どもたちの喜びが満ちあふれておりました。そして、この喜びを現すという点では私たちも同じです。ですから、この日、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」と語りかけるこの御言葉は、クリスマスを喜びの中に待ち望む私たちにとって、最もふさわしい御言葉でもあるのでしょうか。それは、「いつも、絶えず、どんなことがあっても」と言われていることが誰から強制されるものではなく、自ずと湧き上がってくるものでもあるからです。従って、御子のご降誕を喜びの中に待ち望む私たちにとっては、それはあえて言葉にするまでもないことでもあるのでしょうか。

それは、私たちの多くがそれだけ御心に適った歩みをしているからです。つまりは、御心に違わない、外れることもない、御心の内側を、御心が指し示す方向に、自信をもってまっすぐに歩んでいる、喜んでいっているのは私たちの多くがそういう歩みをしているからです。しかし、今、「私たちの多くは」と申しましたように、けれども、それは、「私たちすべてが」ということではありません。喜びたくも喜べない、祈りたくても祈れない、ましてや感謝したくても感謝できない、このような思いの中を過ごしている方は必ずおられるからです。それゆえ、それが誰か、ということに無関心であってはなりません。けれども、「いつも、たえず、どんなことにも」とパウロが言っているのを聞いて、丁寧に自分の周りを見回してみても、もしそういう人たちがいることを知って、私たちの多くはそこで何を思い、何を考えるのでしょうか。それは、この「知った」ということによって、私たちの多くは、子どもたちのように素直に「喜び、祈り、感謝」できなくなってしまおうということです。それは、クリスマスはある特定の限られた、祝うことのできる人々、祝いたいと思う人々だけに許された喜びの時ではないからです。

クリスマスは、人類全体に与えられた喜びであり、それゆえ、そこに例外があってはなりません。皆が心を合わせ一つになっ

て祝うべきもの、それがクリスマスというものなのです。しかし、現実はどうでしょうか。心を合わせ一つになることの難しさ、それを強く感じさせられるのがクリスマスの祝いの中でもあるのでしょうか。そこで、この一つになれないところに負い目を感じ、喜び、祈り、感謝できない日々を過ごす方もおられるのでしょうか。また、そうした思いから逃れるために、私は私、あなたはあなた、と割り切ったものの考え方をする人もいるのでしょうか。ですから、そのような人々にとって、「いつも、絶えず、どんなことにも」というパウロのこの言葉は、水を差すものであるか、あるいは、火に油を注ぐものであるか、そのいずれかということにもなるのでしょうか。けれども、パウロが主を待ち望む私たちに言いたいことは、そのように水を差すことでもなく、また火に油を注ぐことでもありません。

クリスマスを迎える上での正しい過ごし方、ふさわしいあり方は、パウロが言っているように、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」というこの言葉の中に現されているのは間違いありません。それは、この言葉の直後でパウロが「これこそがキリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」と、こう言っていることから分かります。なぜなら、イスラエルの人々が長く待ち望んだ救い主の誕生は神様の御心によるものであるからです。従って、それが実現した以上、クリスマスは「いつも、絶えず、どんなことにも」と言われて然るべきものなのです。それゆえ、この神様の望み、その御心に応えることが私たちすべての振る舞い、行動の原点でもあるのです。ですから、そうである以上、私たちがそれに応えないわけには参りません。ただし、応えたくとも応えられないことがある、パウロがこの言葉を「こうしなさい」と強い調子で言っているのはそのためです。ただ、「御心になるように」と乙女マリアがこう答えたように、御心から外れてクリスマスを祝うことは、当然のことではあります。御心を拒むことは許されることではありません。ですから、このように強く言われることに異論を挟む余地はありません。しかし、この時、私たちが異論を挟むことがないのはそれが理由なので

しょうか。

私たちの多くにとって、クリスマスを祝うということは例年通りのことであり、想定内のことでもあるのです。つまり、「いつも、たえず、どんなことにも」と言われていることは、いつもと変わらない、絶えず常に普通のことを行っているということです。しかも、その先が分かっているわけですから、多少のことはどんなことがあっても目をつぶることのできる、そういうものでもあるのでしょうか。ですから、この当たり前のことを殊更強く言われることは、多くの人にとっては、こちらの方が違和感を感じさせられるに違いありません。それゆえにまた、強く言われれば言われるほど、水を差されたような気分になるのです。それだけではありません。「いつも、絶えず、どんなことにも」と強く言われることは、まるで私たちが何も見ていないかのような気分させられるものでもあるのです。こうして、折角のクリスマスが台無しにさせられ、足を引っ張られているような気持ちにもなってしまう、このように「いつも、たえず、どんなことにも」というこの言葉には、クリスマスをいつも通りに迎えようとする者にとっては不快感を与えるものだとも言えるのでしょうか。

しかし、例年通りというわけにはいかない、その反対の状況においてはどうか。「欲しがりません、勝つまでは」ではありませんが、喜び、祈り、感謝する人々の数が逆転した時、その時、私たちは何を思い、何を考え、どのように振る舞うのでしょうか。それは80年余り前の時代を考えれば分かることです。目的の遂行、達成が社会の至上命題であった時代、それゆえ同調圧力が社会全体に幅を利かすことになりました。ですから、そのような状況下では言いたいことも言えないし、やりたいこともやれないわけです。つまり、物言えば唇寒し、かつて私たちはそういう時代を経験させられたことがあったのです。ですから、そうした中で、私たちクリスチャンは身を潜めるようにクリスマスをお祝いするしかありませんでした。いや、クリスマスどころではない、多くの人たちはそう考えたに違いありません。ただ、ここでパウロがこの「いつも、たえず、どんなときにも」と言っているのは、そのような状況の中で語られたものなのです。それは、イエス様を信じているがゆえに激しい攻撃に曝されていたのが、パウロはじめ、テサロニケの教会の人々であったからです。

ですから、ここからパウロがこの言葉を

どのような気持ちで語ったかが分かります。つまり、厳しい状況の中で固く信仰に立つために語った言葉、それがこの「いつも、絶えず、どんなことにも」という言葉でありました。それゆえ、この言葉に励まされ、信仰を鼓舞することができる者には大きな意味を持つこととなりました。そして、このテサロニケの教会の人々のことを、パウロが「実に、あなた方こそ、私たちの誉れであり、喜びなのです」と別の箇所でごう語っているように、厳しい現実の中で「いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝」していたのがこのテサロニケの教会の人々でありました。従って、パウロのこの言葉は、できない人々、やろうとも思わない人々、そういう人たちに向かって、信仰の神髄とはなんたるかを語るものではありません。彼らにとっては、それが当たり前のことであり、普通のことであったのです。それは、この「いつも、絶えず、どんなことにも」と言われていることが彼らの身にすでに備わっていたからです。

ですから、「喜び、祈り、感謝」することは、彼らにとっては、あえて意識せずとも普通のこととしてこれからも続けていくことのできるものでもありました。従って、この「いつも、絶えず、どんなことにも」と言われている「喜び、祈り、感謝」することへの勧めの言葉は、彼らにとってはあえて語られる必要のない言葉であったと言えるのです。ところが、パウロはそれが分かった上で、あえてこの言葉を語っているのです。それは、彼らの置かれた状況がパウロの目から見てもそれだけ厳しいものであったからです。つまり、パウロをして語らずにはいられなかった、それがこの言葉であったということです。ただ、そうした厳しい状況の中でも、テサロニケの教会の人たちはパウロが認めるように、もう十分にそれをやっていたのです。従って、もっと、もっとと言わんばかりのこのようなことを言えるのはパウロほどの人物だけだとも言えるのでしょうか。

それは、パウロに憐憫の情がなかったからではありません。空気を読む力、人の気持ちをくみ取る力がなかったからでもありません。それが分かった上でなお、この言葉を教会の人々に投げかけずにはいられなかった、それは、パウロが伝道者、牧会者であったからでもありますが、けれども、パウロのこの言葉はそうした自らの職責、役割、つまりは、パウロの個人的な責任感から出たものではありません。もちろ

ん、パウロも自らに与えられたその立場を十分に弁えてはおりました。けれども、それだけがパウロをしてこの厳しい言葉を語らしめたわけではないということです。そこには、もう一步踏み出さざるを得ない何かがあったのです。ですから、こういうところに、パウロの人間性、その物の見方が現されているように思うのですが、それは、また別の見方をすれば、こういうところにパウロの共同体感覚が現されているようにも思うのです。それゆえ、こうして主の教会につながり、その生涯を過ごすイメージがあふれ出ているものがこの「いつも、絶えず、どんなことにも」というこの言葉であるのです。

ですから、それは、押しつけるようなものでもなく、また、教え諭すようなものでもありません。運命共同体というこの感覚がパウロをして語らしめたものであり、それは、この一蓮托生とも言えるパウロのこの感覚が私たちの命の本質に関わるものでもあるからです。つまり、これなくして、私たちは生きることも死ぬこともできない、ましてや、一緒にいることもできない、そういう感覚です。そして、パウロをしてこう語らせているのは、パウロがイエス様と出会ったからでもあります。ただし、イエス様と出会ったということは、パウロにとっては、それが個人的な体験として終わるものではありませんでした。イエス様と出会うということは、パウロがイエス様を信じるがゆえに神の家族に招かれたということです。そして、それはテサロニケの教会の人々もそうですし、私たちもそうです。教会という交わり、共同体というこの前提抜きに語り得ないものがパウロのこの言葉でもあるのです。ただ、もしかしたら、それが私たちにとって一番分かりにくいところなのかも知れません。

こうしてパウロの言葉に聞いているのは、その言葉が私たちという一塊である共同体に向かって語られているからです。けれども、その言葉をどう受け止めるかは、実際にその言葉を聞いているその一人一人でもあるのです。それゆえ、そこには当然違いが出てくるわけですが、そして、この違いゆえに私たちの中には、喜ぶことのできるものもあれば、当然、喜ぶことのできないものもいるのです。立場の違い、環境の違い、能力の違い、この同じではないということによって時にその違いが際立ち、そのため、共同体の中で不協和音を生じることにもなるのです。そこでこの不協和音がもし大きくなれば、どういうことになるの

でしょう。共同体は成り立たなくなってしまう。ただ、パウロは、この言葉をそのような状況の中で語っているわけではありません。先ほども申しましたように、あえて語らずと彼らには十分に分かっている状況の中でパウロは語っていたからです。では、パウロは何を思いこの言葉を語っているのか。それは、この時、パウロのしているもの、感じているものがパウロのこの判断に大きな影響を与えたのは間違いありません。そして、それは、パウロにとって終末がいつ起こるかも分からないものではなく、今すぐに、この瞬間に起こるもの、つまりは、パウロの切迫した終末理解がパウロをして愛する人々に向かってこの言葉を語らせたのです。

しかし、私たちすべてが理解しているように、世の終わりはパウロの考えたようにはすぐには来ませんでした。それどころか、終末は、多くの人たちにとっては、もしかしたら私たちにとっても、もう来ないかもしれない、そう思わせるものでもあったのでしよう。けれども、この多くにとって、もう来ないかも知れないと思わされている終末に、多くの人たちが心揺さぶられ、恐れおののき、怪しげな言説に惑わされ、結果、人生を踏み誤る人が後を絶たないのはどうしてなのでしょう。それは、予測不能な現実が私たちを不安にさせるからです。そして、その不安につけいるのが今問題となっているカルト宗教というものでもあります。ちなみに、カルトというものに自分は引っ掛からないと皆さんが思っているとしたら、その自信と確信はとても危険です。戦時下の私たちがそうであったように、同調圧力による思考停止の状況に陥った時、それが怪しげなものだと分かっているにもかかわらず、距離を保つことが大切です。有り体に言えば、関わらないと言うこと以外他に方法はないのです。ただし、近づかないということは、ただ怖い怖いと言うことではありません。自分自身の弱さを知っていることであり、ですから、パウロがここで「すべてを吟味して、良いものを大事にしないさい。あらゆる悪いものから遠ざかりなさい」と言っていることはそういうことを言っているのです。ただ、自分が弱いと分かっているにもかかわらず、では、このわけの分からないものとどう距離をとればいいのか。ここに、終末は近いと思いつまみ込んでいるパウロの現実とはまったく異なる現実生きる私たちの、パウロのこの言葉に聞いて

いく意味があるように思うのです。

この「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」とのパウロの勧めは、それが、できるかできないか、それをするかしないかが問われているわけではありません。なぜなら、「いつも、絶えず、どんなことにも」と言われ、そして、それがあたかも信仰の目的であるとしたら、それを達成した者は歴史上どれだけいたのでしょうか。恐らくは、それができたのはただ一人のお方において他にいなかったと思います。それがイエス・キリストというお方ですが、ですから、私たちの信仰の目的がイエス様になるということであるなら、それは、神様になろうとするのと何が違うのでしょうか。ですから、もちろん、それが目的であろうはずはありません。そうではなく、大事なことは、私たちが何かになろうとするのでもなく、また何かができるようになるのでもなく、そもそもところで私たちとは何なのか、パウロが言いたいことはこのことです。それは、終末が近かろうが、遅かろうが関係のないことです。近かろうが、遠かろうが、イエス様信じ、信頼する私たちは、一体いかなるものであるのか、ということです。先週、私たちは、1人の兄弟を主の御許へとお送りし、また、今週、1人の姉妹を主の御許へとお送りするのですが、それぞれの備えの時を通して知らされたことは、この私たちとは何者なのかということでした。

「いつも、たえず、どんなことにも」とパウロが語るのには、パウロが終末を近く感じていたからでありました。けれども、私たちがどんなに切迫感したのを感じたとしても、2000年たって未だ訪れてはいないのが世の終わりでもあるのです。それゆえ、主は近い、そういくら叫んでも、多くの人たちはすぐには納得することはできません。けれども、終末がいつ訪れるのかが分からないところに、また納得させられてしまう理由もあるのです。それは、私にも、皆さんにも、誰にも分からないがゆえに不安にさせられてしまうからです。しかし、私たちが、神様に遣わされたイエス様という視点で聖書の御言葉に聞き、私たちの交わり、この共同体の中で起こったことを見つめていくなれば、そこで私たちは何を知るのでしょうか。それは、イエス様において私たちは一つであり、その私たちが間もなくこのお方のお誕生をお祝いしようとしているのです。ただ、クリスマスは、このお方が生まれたか生まれなかったかとい

うところに意味があるのではありません。この方が救い主として歩み、十字架と復活の出来事を経て、神の御許にあってこの時も私たちと共にある、イエス様が生まれたということにおいて大事な点はこの時も私たちと共にいてくださっているということなのです。従って、愛する者を天へとお送りし、悲しみと苦しみの中にあっても、私たちが、このイエス様と共にあるという一点に立ち帰るなら、愛する者の死はこの世にあっては別れであっても主にあっては別れではない、なぜなら、イエス様の十字架と復活の出来事が示すように、イエス様を信じる私たちにとっては、生きることも死ぬこともイエス様にあっては同じ一つのものであるからです。

ですから、パウロの「いつも、絶えず、どんなことにも」と言っていることは、イエス様と一つされている事実、この現実がパウロをしてこう語らせているということです。私たちは弱く、愚かで、過ちを繰り返すものであり、それゆえ、予測不可能な世界の中にあっては常に不安を抱くしかありません。ですから、私たちが確かさを求めるのは、そうした不安の裏返しだとも言えるのですが、しかし、不安を打ち消すように確信を得たところで、そこで得られた確信らしきものはいつ何時もっと大きな不安に変わるかは分からないのです。けれども、イエス様にあっては、つまりは、自分自身の命がイエス様の命と一つとされているというこの一点に私たちが立つなら、パウロが「いつも、絶えず、どんなことにも」と言っているように、そこでまた私たちは大きな平安に包まれることになるのです。ですから、私たちが愛する者を御許へと送るとき、この一点をだけ見つめ、天の御国へとお送りしたいと思うのです。なぜなら、教会という交わりに働くこの力を信じ、「いつも、絶えず、どんなことにも」と御言葉が語るそのままの姿、そのあり方でその時を共に過ごすなら、主は遠いとしか思えないその時に、私たちは主が近いということを知られることになるからです。そして、クリスマスを待ち望むこの時、私たちにそのことを知らしめてくださっているのがイエス様をお遣わしになった神様であり、今この時私たちと共にあるイエス様なのです。祈りましょう。